

「指導と評価の一体化」のための学習評価に関する参考資料(小学校, 中学校)

第3編 単元(題材)ごとの学習評価について(事例)

【案】

第1章 「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方を踏まえた評価規準の作成

- 1 本編事例における学習評価の進め方について
- 2 題材の評価規準の作成のポイント

第2章 学習評価に関する事例について

- 1 事例の特徴
- 2 各事例概要一覧

事例

第1章 「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方を踏まえた評価規準の作成

1 本編事例における学習評価の進め方について

各教科の単元（題材）における観点別学習状況の評価を実施するに当たり、まずは年間の指導と評価の計画を確認することが重要である。その上で、学習指導要領の目標や内容、「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方等を踏まえ、以下のように進めることが考えられる。なお、複数の単元（題材）にわたって評価を行う場合など、以下の方法によらない事例もあることに留意する必要がある。

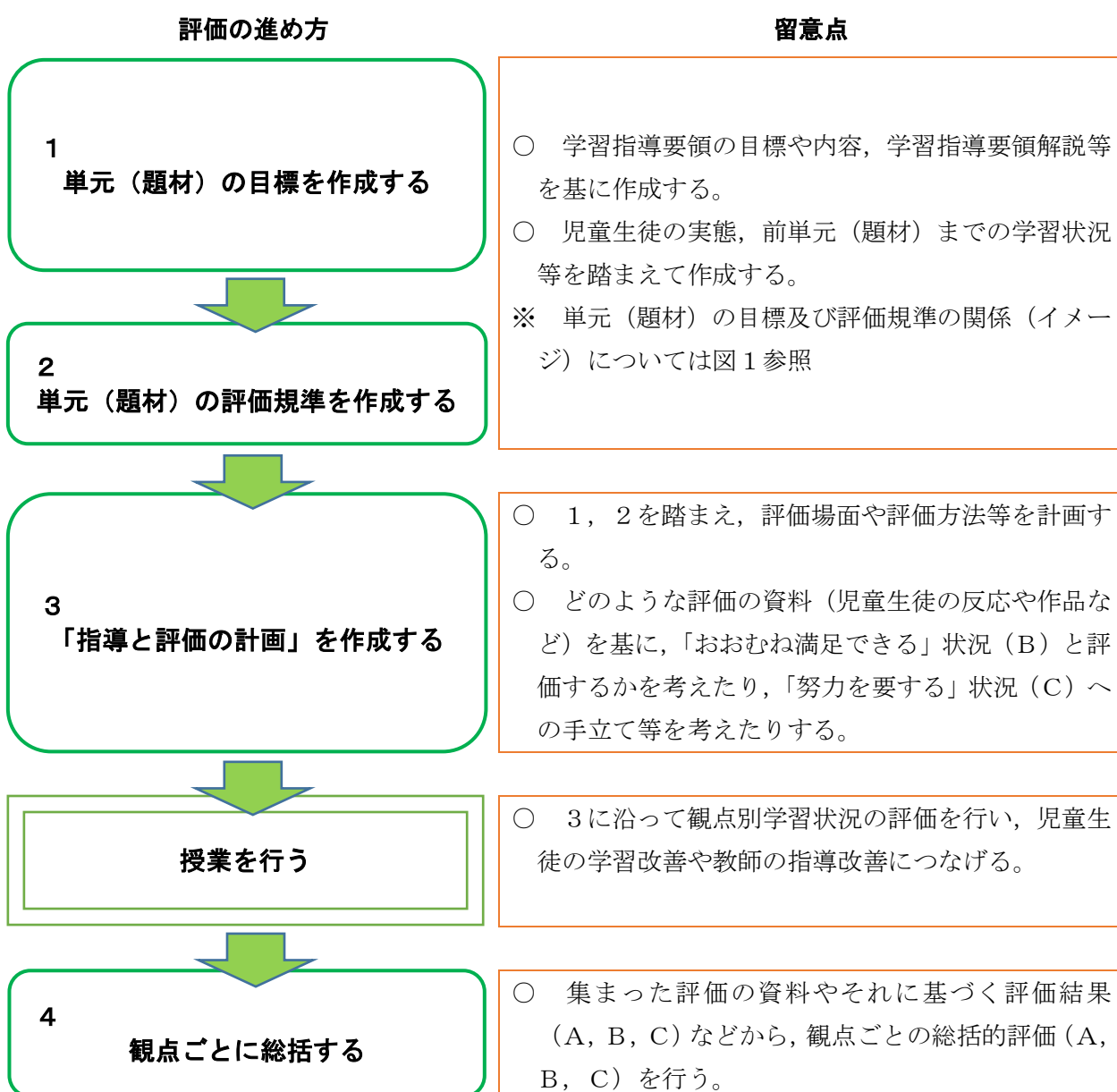
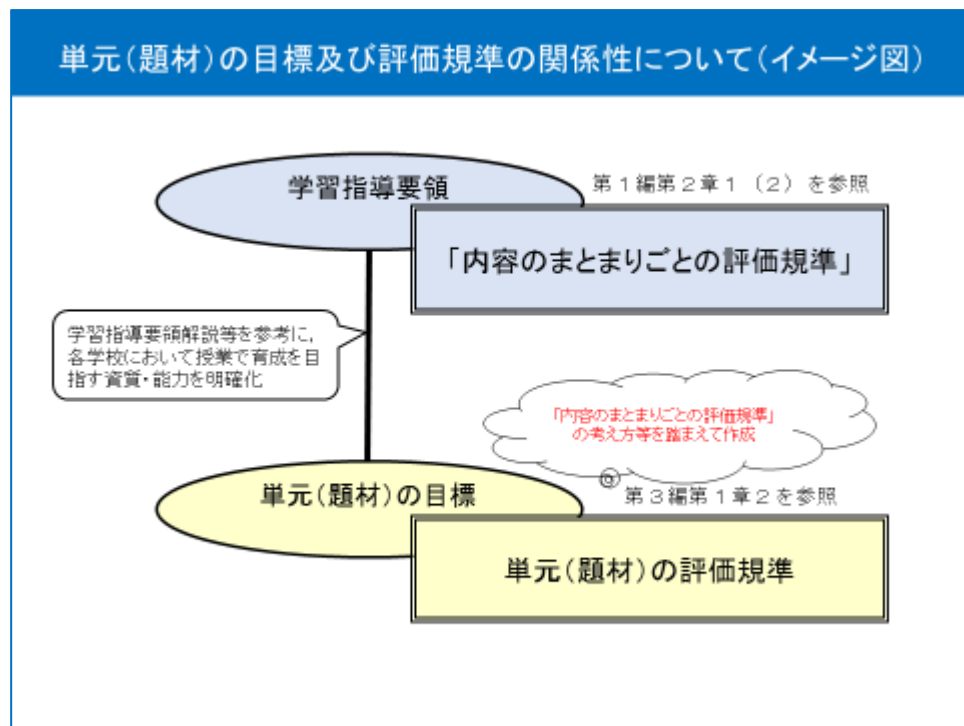


図 1



※ 調整中

2 題材の評価規準の作成のポイント

【題材の評価規準の作成のポイントについて】

○「知識・技能」

- ・知識については、「評価の観点の趣旨」と同様に、事項イの文末を「～している」と変更することで作成することができる。なお、文頭部分に曲名等を挿入することも考えられる。
- ・技能については、技能を身に付けて表現している状態を評価することになるため、「評価の観点の趣旨」の文末では「歌ったり、演奏したり、音楽をつくったりしている」と示している。評価規準においても同様に、事項ウの文末を、扱う分野に応じて「歌っている」「演奏している」「音楽をつくっている」より選択して置き換えることで作成することができる。なお、「B鑑賞」の題材においては設定しない。
- ・事項にある「次の(ア)及び(イ)の」や「次の(ア)から(ウ)までの」の部分には、(ア)から(ウ)までの事項のうち、題材で扱う事項を一つ以上挿入することで設定することができる。なお、複数の事項を示しているものについては、当該題材の目標や学習内容等に応じて、複数の事項の内容を設定することが考えられる。また、評価場面や評価方法が同じである場合、一文で表記することも考えられる。

○「思考・判断・表現」

- ・「思考・判断・表現」については、「評価の観点の趣旨」において、①〔共通事項〕アに関する事、②表現領域に関する事、③鑑賞領域に関する事を示している。評価規準においても同様に、表現領域では①〔共通事項〕ア及び②表現領域に関する内容、鑑賞領域では①〔共通事項〕ア及び③鑑賞領域に関する内容の事項に応じて、それぞれの具体的内容に置き換え、文末を「～している」と変更することで作成することができる。
- ・事項アでは、前半部分に「知識や技能を得たり生かしたりしながら」と示しているが、「得たり生かしたり」は、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」とがどのような関係にあるかを明確にするために示している文言であり、題材の評価規準の例ではその文言を用いていない。
- ・①〔共通事項〕アに関する事については、音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズ、反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横との関係など、「第3 指導計画の作成と内容の取扱い」2(8)に示した「ア 音楽を特徴付けている要素」や「イ 音楽の仕組み」から、その題材の学習において児童の思考・判断のよりどころとなる、主な音楽を形づくっている要素を適切に選択して置き換える（例1・2(ア)・2(イ)の下線部）。

○「主体的に学習に取り組む態度」

- ・当該学年の「評価の観点の趣旨」の内容を踏まえて作成する。「評価の観点の趣旨」の文頭部分「音や音楽に親しむことができるよう、」は、「主体的に学習に取り組む態度」における音楽科の学習の目指す方向性を示している文言であり、題材の評価規準の例ではその文言を用いていない。

- ・「評価の観点の趣旨」の「表現及び鑑賞」の部分は、扱う領域や分野に応じて「歌唱」「器楽」「音楽づくり」「鑑賞」より選択して置き換える。なお、「学習活動」とは、その題材における「知識及び技能」の習得や「思考力、判断力、表現力等」の育成に係る学習活動全体を指している。
- ・「評価の観点の趣旨」の「楽しみながら」の部分は、「主体的・協働的に」に係る文言であり、単に活動を「楽しみながら」取り組んでいるかを評価するものではない。あくまで、主体的・協働的に取り組む際に「楽しみながら」取り組めるように指導を工夫する必要があることを示唆しているものである。
- ・文頭部分には、その題材の学習に粘り強く取り組んだり、自らの学習を調整しようとする意思をもったりできるようにするために必要となる、取り扱う教材曲の特徴や学習内容など、児童に興味・関心をもたせたい事柄に関して記載することが考えられる（例 1・2 (ア)・2 (イ) の波下線部）。ただし、興味・関心をもっているかということのみを評価するものではないことに留意が必要である。

＜参考：題材の評価規準の基本構造（第 1 学年及び第 2 学年「A 表現・歌唱」の例）＞

* 下線部は事項の文言を「評価の観点の趣旨」に倣って置き換えた部分、ゴシック体の [] 内及び波線部は、事項や「評価の観点の趣旨」の文言を、題材で扱う内容に合わせて適切に選択するなどして置き換えたり挿入したりする部分である。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・曲想と音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて<u>気付いている</u>。 ・思いに合った表現をするために必要な、[事項ウの (ア), (イ), (ウ)] (いずれかを選択) を<u>身に付けて歌っている</u>。	[音色, リズム, 速度, 旋律, 強弱, 音の重なり, 和音の響き, 音階, 調, 拍, フレーズ, 反復, 呼びかけとこたえ, 変化, 音楽の縦と横との関係など](その題材の学習において児童の思考・判断のよりどころとなる, 主な音楽を形づくっている要素を適切に選択) を聴き取り, それらの働きが生み出すよさや面白さ, 美しさを感じ取りながら, 聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて<u>考え</u>, 曲想を感じ取って表現を工夫し, どのように歌うかについて思いを<u>もっている</u>。	[その題材の学習に粘り強く取り組んだり, 自らの学習を調整しようとする意思をもったりできるようにするために必要となる, 取り扱う教材曲の特徴や学習内容など, 興味・関心をもたせたい事柄] に興味をもち, 音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に<u>歌唱</u>の学習活動に取り組もうとしている。

【題材の評価規準 例】

例 1 第 1 学年及び第 2 学年 「A 表現」(1) 歌唱の活動 及び〔共通事項〕(1)

	知識及び技能	思考力、判断力、表現力等	学びに向かう力、人間性等
	イ 曲想と音楽の構造との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付くこと。 ウ 思いに合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。 (ア) 範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする技能 (イ) 自分の歌声及び発音に気を付けて歌う技能 (ウ) 互いの歌声や伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能 〔共通事項〕 イ 音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる身近な音符、休符、記号や用語について、音楽における働きと関わらせて理解すること。(※1)	ア 歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いをもつこと。 〔共通事項〕 ア 音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったこととと感じ取ったこととの関わりについて考えること。(※1)	※内容には、学びに向かう力、人間性について示されていないことから、当該学年目標(3)を参考にする。

学習指導要領
2 内容

題材の 評価規 準 例 ※ 2	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	知 曲想と音楽の構造（※3）との関わり、曲想と歌詞の表す情景や気持ちとの関わりについて気付いている。	思 <u>旋律、呼びかけとこたえ</u> を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、曲想を感じ取って表現を工夫し、どのように歌うかについて思いをもっている。	態 <u>呼びかけ合って歌う表現に興味をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱の学習活動に取り組もうとしている。</u>
	技 思いに合った表現をするために必要な、範唱を聴いて歌ったり、階名で模唱したり暗唱したりする技能を身に付けて歌っている。		
	技 思いに合った表現をするために必要な、自分の歌声及び発音に気を付けて歌う技能を身に付けて歌っている。		
	技 思いに合った表現をするために必要な、互いの歌声や伴奏（※4）を聴いて、声を合わせて歌う技能を身に付けて歌っている。（※5）		

※1：〔共通事項〕については、配慮事項に『A表現』及び『B鑑賞』の指導と併せて、十分な指導が行われるよう工夫すること」と示している。また、「小学校学習指導要領解説音楽編」において「指導計画の作成に当たっては、各領域や分野の事項と〔共通事項〕で示しているア及びイとの関連を図り、年間を通じてこれらを継続的に取り扱うように工夫することが重要である。」と示している。このことから、〔共通事項〕(1)の事項ア及び事項イについては、各領域や分野の事項との関連を図った上で、指導と評価を行う必要がある。なお、事項アについては、全ての題材で必ず位置付けなければ学習として成立しないため、「思考・判断・表現」の観点の趣旨の中に位置付けている。

一方、事項イについては、「知識」の観点の趣旨に直接的には示していない。事項イの内容については、「音楽における働きと関わらせて理解すること」と示しており、主に「曲想と音楽の構造との関わり」について理解する過程やその結果において理解されるものである。

※2：「知識・技能」の評価規準については、知識と技能とを個別に評価したり、一体的に評価したりするケースが想定される。本参考資料においては、各評価規準の略した表記として、知識に関する評価規準を「知」と、技能に関する評価規準を「技」と、知識と技能の両方に関する評価規準を「知技」と、区分して示している。なお、「思考・判断・表現」の観点についての評価規準は「思」、

「主体的に学習に取り組む態度」の観点についての評価規準は「態」と表記している。

※3：「音楽の構造」とは、音楽を形づくっている要素の表れ方や、音楽を特徴付けている要素と音楽の仕組みとの関わり合いである。この「音楽の構造」は、「思考・判断・表現」の評価規準において位置付けた音楽を形づくっている要素との関わりについて十分考慮して指導と評価を行う必要がある。例えば、例1では、「思考・判断・表現」の評価規準で、音楽を形づくっている要素として「旋律」と「呼びかけとこたえ」を選択して位置付けているが、学習活動においては、これら「旋律」や「呼びかけとこたえ」を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えることを、知識に関する学習における「音楽の構造」を捉えることと関連付けて指導することが大切になってくる。

※4：事項に示している内容のうち、本題材の学習で扱わない部分（例1では、伴奏を伴わない教材曲を扱う場合を想定）については削除することも考えられる。

※5：技能の評価規準に関しては「～をするために必要な」の後に適宜「，」を挿入する。

＜参考＞

○ 学年や、領域及び分野によって事項の文言が異なるため、評価規準を作成する際は、当該の学年や領域及び分野ごとの事項の文言に合わせて設定する。

〔学年が異なる場合の例〕

第3学年及び第4学年の「A表現」(1)歌唱の活動について、「知識・技能」の評価規準を作成する場合は、＜例1＞の「知識・技能」に示した例と下線部の文言が異なるため注意が必要である。

第3学年及び第4学年 「A表現」(1)歌唱の活動	
学習指導要領 (イ及びウのみ)	題材の評価規準 例 「知識・技能」
イ 曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて気付くこと。	<u>知</u> 曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて気付いている。
ウ 思いや意図に合った表現をするために必要な次の(ア)から(イ)までの技能を身に付けること。	<u>技</u> 思いや意図に合った表現をするために必要な、範唱を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして歌う技能を身に付けて歌っている。
(ア) 範唱を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして歌う技能	<u>技</u> 思いや意図に合った表現をするために必要な、呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない歌い方で歌う技能を身に付けて歌っている。
(イ) 呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない歌い方で歌う技能	<u>技</u> 思いや意図に合った表現をするために必要な、互いの歌声や副次的な旋律、伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能を身に付けて歌っている。
(イ) 互いの歌声や副次的な旋律、伴奏を聴いて、声を合わせて歌う技能	

〔分野が異なる場合の例〕

領域及び分野ごとに事項の文言が異なる部分に注意が必要である。第1学年及び第2学年の「A表

現」(2)器楽の活動について、「技能」の評価規準を作成した場合、＜例1＞の「技能」に示した例と下線部の文言が異なる。また、「評価の観点の趣旨」の文末で「歌ったり、演奏したり、音楽をつくったり」と示した部分は、扱う分野に応じて「歌って」「演奏して」「音楽をつくって」より選択して以下のように波線部に挿入する。

第1学年及び第2学年 「A表現」(2)器楽の活動	
学習指導要領（ウのみ）	題材の評価規準 例 「技能」
ウ 思いに合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。	<u>技</u> 思いに合った表現をするために必要な、 <u>範奏</u> を聴いたり、 <u>リズム譜</u> などを見たりして <u>演奏する技能</u> を身に付けて <u>演奏している</u> 。
(ア) <u>範奏を聴いたり、リズム譜などを見たりして演奏する技能</u>	<u>技</u> 思いに合った表現をするために必要な、 <u>音色</u> に気を付けて、 <u>鍵盤ハーモニカ（※）を演奏する技能</u> を身に付けて <u>演奏している</u> 。
(イ) <u>音色に気を付けて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能</u>	<u>技</u> 思いに合った表現をするために必要な、 <u>互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能</u> を身に付けて <u>演奏している</u> 。
(ウ) <u>互いの楽器の音や伴奏を聴いて、音を合わせて演奏する技能</u>	

※「鍵盤ハーモニカ」については、一例として示している。このように取り扱う具体的な楽器名を挿入することも考えられる。

例2 第5学年及び第6学年「A表現」(3)音楽づくりの活動及び〔共通事項〕(1)

【題材の評価規準の作成のポイントについて】

○音楽づくりの活動においては、各事項の(ア)及び(イ)の内容のまとまりを念頭に置いて題材を構成することが必要となる。各観点の評価規準の作成の仕方については、基本的に<例1>と同様であるが、加えて以下の点に留意が必要である。

○「知識・技能」

- ・事項ウの前半部分「発想を生かした表現や、思いや意図に合った表現」のうち、「発想を生かした表現」をするために必要な技能として(ア)を、「思いや意図に合った表現」をするために必要な技能として(イ)を位置付けている。よって、この部分については、(ア)及び(イ)の内容のまとまりに配慮しつつ、後半部分の「次の(ア)及び(イ)の技能」に対応する部分について(ア)を選んで置き換えた場合は「発想を生かした表現」を、(イ)を選んで置き換えた場合は「思いや意図に合った表現」を選択する。

○「思考・判断・表現」

- ・最後の部分は、事項アの(ア)、(イ)のうち、いずれか適切なものを選択して挿入し、文末を「～ている」と変更する。

<参考：第5学年及び第6学年 「A表現」(3)音楽づくりの活動 及び〔共通事項〕(1)>

*下線部は事項の文言を「評価の観点の趣旨」に倣って置き換えた部分、ゴシック体の〔 〕内及び波線部は、事項や「評価の観点の趣旨」の文言を題材で扱う内容に合わせて適切に選択するなどして置き換えたり挿入したりする部分である。

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
・[事項イの(ア)又は(イ)]について、それらが生み出すよさや面白さなどに関わらせて<u>理解している</u>。 ・[下で(ア)を選んだ場合は「発想を生かした表現」、(イ)を選んだ場合は「思いや意図に合った表現」]をするために必要な、[事項ウの(ア)又は(イ)]を<u>身に付けて音楽をつくっている</u>。	〔音色、リズム、速度、旋律、強弱、音の重なり、和音の響き、音階、調、拍、フレーズ、反復、呼びかけとこたえ、変化、音楽の縦と横との関係など〕(その題材の学習において児童の思考・判断のよりどころとなる、主な音楽を形づくっている要素を適切に選択)を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、[事項アの(ア)又は(イ)](いずれかを選択し、文末を「～ている」と変更する)。	〔その題材の学習に粘り強く取り組んだり、自らの学習を調整しようとする意思をもったりできるようにするために必要となる、取り扱う教材曲の特徴や学習内容など、興味・関心をもたせたい事柄〕に興味・関心を持ち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に<u>音楽づくりの</u>学習活動に取り組もうとしている。

学習指導要領 2 内容	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	イ 次の(ア)及び(イ)について、それらが生み出すよさや面白さなどに関わらせて理解すること。 (ア) いろいろな音の響きやそれらの組合せの特徴 (イ) 音やフレーズのつなげ方や重ね方の特徴 ウ 発想を生かした表現や、思いや意図に合った表現をするために必要な次の(ア)及び(イ)の技能を身に付けること。 (ア) 設定した条件に基づいて、即興的に音を選択したり組み合わせたりして表現する技能 (イ) 音楽の仕組みを用いて、音楽をつくる技能 〔共通事項〕 イ 音楽を形づくっている要素及びそれらに関わる音符、休符、記号や用語について、音楽における働きと関わらせて理解すること。(※1)	ア 音楽づくりについての知識や技能を得たり生かしたりしながら、次の(ア)及び(イ)をできるようにすること。 (ア) 即興的に表現することを通して、音楽づくりの様々な発想を得ること。 (イ) 音を音楽へと構成することを通して、どのように全体のまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもつこと。 〔共通事項〕 ア 音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えること。(※1)	※内容には、学びに向かう力、人間性について示されていないことから、当該学年目標(3)を参考にする。

例 2 (ア) 事項ア(ア), イ(ア), ウ(ア)で題材を構成している場合の例

題材の評価規 準 例	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	知 いろいろな音の響きやそれらの組合せの特徴(※2)について、それらが生み出すよさや面白さなどに関わらせて理解している。 技 発想を生かした表現をするために必要な、設定した条件に基づいて、即興的に音を選択したり組み合わせたりして表現する技能を身に付けて音楽をつくっている。	思 <u>音色, 音の重なり, 音楽の縦と横との関係</u>を聴き取り, それらの働きが生み出すよさや面白さ, 美しさを感じ取りながら, 聴き取ったことと<u>感じ取ったこととの関わり</u>について考え, 即興的に表現することを通して, 音楽づくりの様々な発想を得ている。	態 <u>楽器の音の響きや組合せの面白さに興味・関心</u>をもち, 音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に音楽づくりの学習活動に取り組もうとしている。

例 2 (イ) 事項ア(イ), イ(イ), ウ(イ)で題材を構成している場合の例

題材の評価規 準 例	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
	知 音やフレーズのつなげ方や重ね方の特徴(※2)について、それらが生み出すよさや面白さなどに関わらせて理解している。 技 思いや意図に合った表現をするために必要な、音楽の仕組みを用いて、音楽をつくる技能を身に付けて音楽をつくっている。	思 <u>リズム, 反復, 音楽の縦と横との関係</u>を聴き取り, それらの働きが生み出すよさや面白さ, 美しさを感じ取りながら, 聴き取ったことと<u>感じ取ったこととの関わり</u>について考え, 音を音楽へと構成することを通して, どのように全体のまとまりを意識した音楽をつくるかについて思いや意図をもっている。	態 <u>リズムのつなげ方や重ね方のよさや面白さに興味・関心</u>をもち, 音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に音楽づくりの学習活動に取り組もうとしている。

※1 : [共通事項] については<例1>と同様

※2 : 例2(ア)及び例2(イ)の「いろいろな音の響きやそれらの組合せの特徴」や「音やフレーズのつなげ方や重ね方の特徴」は、「思考・判断・表現」の評価規準において位置付けた音楽を形づくっている要素との関わりについて十分考慮して指導と評価を行う必要がある。この例では、「思考・判断・表現」の評価規準で、音楽を形づくっている要素として「音色」「リズム」「音の重なり」「反復」「音楽の縦と横との関係」を選択して位置付けているが、これらの音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えることを、知識に関する学習における「特徴」を捉えることと関連付けて指導することが大切になってくる。

第2章 学習評価に関する事例について

1 事例の特徴

第1編第1章2（4）で述べた学習評価の基本的な方向性を踏まえつつ、平成29年改訂学習指導要領の趣旨・内容の徹底に資する評価の事例を示すことができるよう、本参考資料における各教科の事例は、原則として以下のような方針を踏まえたものとしている。

○ 題材に応じた評価規準の設定から評価の総括までとともに、児童の学習の改善及び教師の指導の改善までの一連の流れを示している

本参考資料で提示する事例は、いずれも、題材の評価規準の設定から、最終的に学習過程で得た評価情報を総括するまでとともに、評価結果を児童の学習や教師の指導の改善に生かすまでの一連の学習評価の流れを念頭においたものである。なお、各教科とも事例の一つは、この一連の流れを特に丁寧に示している。

○ 観点別の学習状況について評価する時期や場面の精選について示している

報告や改善等通知では、学習評価については、日々の授業の中で児童生徒の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことに重点を置くことが重要であり、観点別の学習状況を記録に残すことについては、毎回の授業ではなく原則として単元や題材など内容や時間のまとまりごとに、それぞれの実現状況を把握できる段階で行うなど、その場면을精選することが重要であることが示された。このため、観点別の学習状況について評価する時期や場面の精選について、「指導と評価の計画」の中で、具体的に示している。

○ 評価方法の工夫を示している

各教科・科目の評価の中で、ワークシートや作品などの評価材料をどのように活用したかなど、教科の特性に応じて、評価方法の多様な工夫について示している。

2 各事例概要一覧

事例1 キーワード 指導と評価の計画から評価の総括まで

「曲のとくちょうをとらえて表現しよう」(第4学年)

本事例は、「とんび」と「エーデルワイス」の曲想と音楽の構造との関わりなどについて気付くとともに、思いや意図に合った音楽表現をするために必要な技能を身に付けながら、曲の特徴を捉えた表現を工夫して歌ったりリコーダーを演奏したりする、歌唱と器楽の題材である。学習指導要領の内容は、「A表現」(1)歌唱の事項ア、イ、ウ(イ)、(2)器楽の事項ア、イ(ア)(イ)、ウ(ア)(イ)、〔共通事項〕ア(本題材において思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素は、旋律、フレーズ、反復、変化)を扱う。ここでは、指導と評価の計画から評価の総括までについて紹介している。

事例2 キーワード 「知識・技能」の評価

「がっきのおとをたのしもう」(第1学年)

本事例は、打楽器で様々な音の出し方を工夫する音遊びをし、鑑賞教材では打楽器の音に特徴がある「シンコペーテッド クロック」を扱う。音遊びや鑑賞で感じ取ったことを生かして、時計の様子を表す音楽づくりの題材である。学習指導要領の内容は、「A表現」(3)音楽づくりの事項ア(ア)、イ(ア)、ウ(ア)、「B鑑賞」の(1)鑑賞の事項ア、イ、〔共通事項〕ア(本題材において思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素は、音色、リズム、反復)を扱う。ここでは、知識・技能の評価について紹介している。

事例3 キーワード 「思考・判断・表現」の評価

「和音に合わせて旋律をつくろう」(第5学年)

本事例は、和音の響きとその移り変わりや、和音と旋律との関わりについて理解するとともに、思いや意図に合った音楽表現をするために必要な、音楽の仕組みを用いて、音楽をつくる技能を身に付けながら、和音の移り変わりに合った旋律をつくる、音楽づくりの題材である。学習指導要領の内容は、「A表現」(3)音楽づくりの事項ア(イ)、イ(イ)、ウ(イ)、〔共通事項〕ア(本題材において思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素は、旋律、和音の響き、音楽の縦と横との関係)を扱う。ここでは、思考・判断・表現の評価について紹介している。

事例4 キーワード 「主体的に学習に取り組む態度」の評価

「地域の祭り囃子に親しもう」(第3学年)

本事例は、「葛西囃子」と「静岡浅間神社祭礼囃子」の曲想と音楽の構造との関わりなどについて気付くとともに、祭りの音楽のよさなどを見いだし、曲全体を味わって聴く鑑賞の題材である。学習指導要領の内容は、「B鑑賞」(1)の事項ア、イ、〔共通事項〕ア(本題材において思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素は、音色、リズム、速度、変化)を扱う。ここでは、主体的に学習に取り組む態度の評価について紹介している。なお、本題材では地域の人材を活用し、児童が実際の演奏に触れたり、実際に締太鼓等を演奏したりする活動を取り入れている。

音楽科 事例 1

キーワード 「指導と評価の計画から評価の総括まで」

題材名

曲のとくちょうをとらえて表現しよう
第4学年 「A表現・歌唱」「A表現・器楽」

内容のまとめ

〔第3学年及び第4学年〕「A表現」(1)歌唱の活動 及び〔共通事項〕(1) / (2)器楽の活動 及び〔共通事項〕(1)

1 題材の目標

- (1)「とんび」、「エーデルワイス」の曲想と音楽の構造との関わりなどについて気付くとともに、思いや意図に合った音楽表現をするために必要な技能を身に付ける。
- (2)「とんび」、「エーデルワイス」の旋律、フレーズ、反復、変化などを聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように歌ったり演奏したりするかについて思いや意図をもつ。
- (3)曲の特徴を捉えて表現する学習に興味をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱や器楽の学習活動に取り組み、日本のうたやリコーダーに親しむ。

※「題材の目標」は次のように1文で示すことも考えられる。

「とんび」、「エーデルワイス」の曲想と音楽の構造との関わりなどについて気付くとともに、思いや意図に合った音楽表現をするために必要な技能を身に付けながら、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、思いや意図をもって歌ったり演奏したりし、日本のうたやリコーダーに親しむ。

2 本題材で扱う事項の内容

2 内容 A 表現

- (1)歌唱の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 歌唱表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図をもつこと。

イ 曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて気付くこと。

ウ 思いや意図に合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。

(イ)呼吸及び発音の仕方に気を付けて、自然で無理のない歌い方で歌う技能

- (2)器楽の活動を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 器楽表現についての知識や技能を得たり生かしたりしながら、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもつこと。

イ 次の(ア)及び(イ)について気付くこと。

(ア)曲想と音楽の構造との関わり

(イ)楽器の音色や響きと演奏の仕方との関わり

ウ 思いや意図に合った表現をするために必要な次の(ア)から(ウ)までの技能を身に付けること。

(イ)音色や響きに気を付けて、旋律楽器及び打楽器を演奏する技能

〔共通事項〕

(1) 「A表現」及び「B鑑賞」の指導を通して、次の事項を身に付けることができるよう指導する。

ア 音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考えること。

(本題材において思考・判断のよりどころとなる主な音楽を形づくっている要素：旋律、フレーズ、反復、変化)

3 題材の評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
①[技] 思いや意図に合った音楽表現をするために必要な、呼吸に気を付けて、自然で無理のない歌い方で歌う技能を身に付けて歌っている。(歌唱) ②[知] 曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付いている。(歌唱・器楽) ③[知技] リコーダーの音色や響きと演奏の仕方との関わりについて気付くとともに、思いや意図に合った表現をするために必要な、音色や響きに気を付けてリコーダーを演奏する技能を身に付けて演奏している。(器楽)	[思]① 旋律、フレーズ、反復、変化を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図をもっている。(歌唱) [思]② 旋律、フレーズ、反復、変化を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。(器楽)	[態]① 曲の特徴を捉えて表現する学習に興味をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱や器楽の学習活動に取り組もうとしている。 (歌唱・器楽)

4 指導と評価の計画（5 時間）

※ 丸数字…全員の学習状況を記録に残す場面

次	時間	◎ねらい ○学習内容 ・学習活動	知技	思	態
第一次	◎「とんび」の曲の特徴を捉えた表現を工夫して歌う。				
	第1時	○「とんび」の歌詞の表す様子や旋律の反復など曲の特徴を捉える。 ・範唱を聴いて感じたことを発表する。 ・歌詞を読んだり、とんびが空を舞う写真を見たりしながら、歌詞の表す様子や雰囲気を感じ取る。 ・音程やリズムに気を付けて、楽譜を見ながら歌詞唱する。 ・曲の特徴的なところをワークシートに書いて発表する。 (児童の記述例) 「ピンヨロのところは、とんびが鳴きながら飛んでいる様子を歌っていて面白い」 ・歌詞の表す様子を思い浮かべながら歌う。 ○「とんび」の曲の特徴を捉えて表現を工夫する。 ・第3フレーズ（9～12小節）の「ピンヨロ」の部分について、とんびが鳴きながら飛ぶ様子や、旋律の反復などの特徴を捉えて表現を工夫する。 (児童の工夫例) 「とんびが鳴きながら近付いてきて、去っていく様子を表したいから、前半2小節はfで後半2小節はpで歌おう」 ・第1時で学習した表現を生かして、みんなで「とんび」を歌う。			
	第2時	○旋律、フレーズ、反復、変化などをよりどころにして、「とんび」の曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて気付く。 ・前時を振り返り、第3フレーズの「ピンヨロ」の部分について表現を工夫して歌う。 ・歌いながら、旋律の動きを手の動きで表す。 ・歌いながら第1、2、4フレーズの旋律の反復や、第3フレーズでの変化に気付いたことをワークシートに書く（第1フレーズ：1～4小節／第2フレーズ：5～8小節／第4フレーズ：13～16小節）。 (児童の記述例) 「1段目と2段目は上がったり下がったりする旋律の動きで、とんびがゆったり飛んでいる様子を表している」 「1段目と2段目の旋律の動きがよく似ているけれど、3段目は全然違う」 ○「とんび」の曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて気付いたことを生かして表現を工夫し、思いや意図をもつ。 ・第1、2、4フレーズと第3フレーズの動きの違いに着目して考えたり歌ったりする。	① 技聴取 ② 知記述・発言	① 記述・発言・聴取	

		(児童の工夫例) ・「1, 2, 4 段目では旋律の音が上がるときクレシェンド, 下がるときデクレシェンドすると, とんびがゆったりと飛んでいる様子が伝わるかな」 ・「3 段目は他の部分と違って, とんびの鳴いている様子を表せるように, 遠くまで響くような歌い方で歌えるようにしよう」 ○第1～2 時で学習したことを生かし, 思いや意図に合った表現をするために必要な, 呼吸に気を付けて, 自然で無理のない歌い方で歌う技能を身に付けて歌う。			
第二次		◎「エーデルワイス」の曲の特徴を捉えた表現を工夫してリコーダーを演奏する。			
	第3 時	○「エーデルワイス」の特徴を捉えてリコーダーで旋律を演奏する。 ・旋律の特徴を捉えながら, リコーダーの範奏を聴く。 ・3 拍子の拍のまとまりを捉えて体を動かしたり, 楽譜を見ながら階名唱をしたりする。 ・範奏を聴いたり楽譜を見たりしながら, リコーダーで旋律を演奏する。 ○運指や音色に気を付けてリコーダーを演奏する。 ・運指に気を付けて曲全体を演奏する。 ・音色や響きに気を付けて, 適切な息の強さやタンギングで演奏する。			
	第4 時	○「エーデルワイス」の特徴を捉えてリコーダーの表現を工夫する。 ・「とんび」での学習を振り返りながら, 旋律の動きとフレーズのまとまりを考えて, 表現を工夫する。 (児童の記述例) 「前半, 上がって下がる旋律が反復されるところが『とんび』に似ている」 「4 小節の旋律のまとまりをなめらかに吹きたい」 ・第3 フレーズ (17～24 小節) について, 曲想の変化を捉えて表現を工夫する。 (児童の工夫例) 「3 段目はこれまでのなめらかな吹き方とは違う」 「3 段目ははずむような感じだから, タンギングを変えてみよう」	② 知記述・発言	② 記述・発言・聴取	
	第5 時	○前時までの学習を基に, グループごとに, 「エーデルワイス」の特徴を捉えた表現を工夫し, 思いや意図に合った表現をするために必要な, リコーダーの演奏の仕方に関する知識と技能を身に付けてリコーダーを演奏する。 ・第2 フレーズが再び現れるという反復など, 音楽の仕組みを捉えて表現を工夫する。 (児童の工夫例) 「1, 2, 4 段目はなめらかに吹けるように, 息の使い方に気を付けて演奏しよう」 「3 段目ははずむような感じだから, 他の部分よりもタンギングをはっきりさせて吹けるようにしよう」 ・旋律の動きにふさわしい息の強さやタンギングに気を付けて演奏する。	③ 知技聴取・発言・記述		① 観察・記述・聴取

	○グループごとに、表現を工夫した「エーデルワイス」の演奏を発表する。 ・演奏を工夫した点を紹介しながら発表する。 ・各グループの発表を聴き、工夫が表れていたところについて話し合ったり、その工夫を取り入れて全体で演奏したりする。			
--	---	--	--	--

注：丸数字の評価規準が設定されていない授業においても、教師の指導の改善や児童の学習改善に生かすために、児童の学習状況を確認することは重要である。

5 観点別学習状況の評価の進め方

本事例は、「A表現・歌唱」、「A表現・器楽」の複数の活動分野から内容を構成し、観点別評価を行うようにしたものである。

（１）参考資料を活用した評価規準の設定

本題材における評価規準は、参考資料の第2編で示した「内容のまとまりごとの評価規準」の考え方を踏まえ、題材のねらい、教材の特徴、学習活動等を考慮して設定したものである。

本事例では、題材全体を通じて、題材の目標に対応した観点について評価することとし、目標の実現状況が見取りやすいようにした。「とんび」を取り上げた「A表現・歌唱」の活動及び「エーデルワイス」を取り上げた「A表現・器楽」の活動の両分野において、「知識・技能」、「思考・判断・表現」、「主体的に学習に取り組む態度」のそれぞれの観点の学習状況の評価する機会を設定し、それらに関連付けながら評価することとした。

（２）題材内でのバランスの取れた評価計画の工夫

観点別に評価を行う際には、5時間の配当時間内におけるバランスを考慮するとともに、1単位時間に対し平均して1～2の評価規準を設定し、効果的・効率的に評価できるよう配慮した。

なお、評価項目の配置については、前後の関連付けも工夫している。①[技]は[思]①の後に、③[知技]は[思]②の後にそれぞれ置いている。これは技能に関する事項ウにおける「思いや意図に合った表現をするために必要な技能」という位置付けに基づき、「思考力、判断力、表現力等」と関連付けられた技能を見取るため、ここに位置付けている。

（３）指導内容の関連付けと評価場面の精選

題材を構想するに当たっては、適宜、〔共通事項〕(1)アの内容を要としながら、各領域や分野の関連を図ることが重要である。本事例では、(1)歌唱の活動における事項イ及び(2)器楽の活動における事項イ(ア)の知識の学習について、旋律やフレーズ、反復や変化などの音楽を形づくっている要素を思考・判断のよりどころとしながら、「曲想と音楽の構造などとの関わり」という共通する知識の内容同士を結び付け、互いに関連性をもたせるよう題材を構想している。このように歌唱の活動と器楽の活動において習得を目指す知識について、その題材の中で共通する内容として位置付けた場合、評価においても②[知]のように、一体のものとして評価規準を設定することが考えられる。

また、知識と技能との関連付けも重要である。例えば、本事例で扱っているA表現(2)器楽の事項ウ(イ)の内容については、小学校学習指導要領解説音楽編で、事項イ(イ)に示す知識に関する内容との関連を図ることの重要性を示している(p. 69)。このことを踏まえ、本事例においては、A表現(2)器楽の事項イ(イ)及び事項ウ(イ)について、③**知技**のように、これらを統合した評価規準として設定している。

このように、評価計画の作成に当たっては、評価の観点の趣旨を踏まえ、評価の内容について関連性を考慮することが大切であり、場合によっては、前述のように一体的に評価することが有効である。こういった工夫によって評価場面を精選するとともに、日々の授業において児童の学習状況を適宜把握して指導の改善に生かすことが重要である。

ただし、統合した形で一体的に評価規準を設定する場合は、評価場面や評価方法等について慎重に検討することが不可欠である。知識の評価を統合する場合としては、対応する事項の内容が共通するもの同士が考えられる(歌唱、器楽、鑑賞における「曲想と音楽の構造との関わり」など)。また、評価場面や評価方法が共通する知識と技能の評価及び技能同士の評価を統合することが考えられるが、知識と技能の評価を統合することは、器楽イ(イ)とウ(イ)のように関連性が高いもの同士に限られる。なお、知識・技能の評価に際して、統合した形で一体的に評価を行った場合、どの内容について課題があったかを把握した上で所見等に記録を残すようにし、次の題材や学期、次年度等の指導に生かすことができるようにする。

本事例では第3時に、「範奏を聴いたり楽譜を見たりしながら」演奏する活動を行っているが、すでに本題材までの学習において「範奏を聴いたり、ハ長調の楽譜を見たりして演奏する技能」は、この活動において必要十分な程度に習得しており、その技能を生かして活動するものと位置付けた。したがって、本題材では技能の習得状況については評価の対象としていない。しかし、その技能を活動で生かすことができている場合には、その状況を把握し支援を行うことは不可欠である。

(4) 指導に生かす評価と学習状況を記録に残す場面との関わり

本事例で評価規準を設定して行っている評価は、評価規準に基づいて児童の学習状況をA・B・Cで判断し、一定期間(学期、年間等)の総括に集約する評価である。一方、教師は授業の中で常に児童の学習状況を把握し、それを基に児童の学習を充実させていく指導に生かす評価を行っている。指導計画や授業の展開において、このような指導に生かす評価と関わらせながら、評価規準に基づき、評価の結果を記録に残す場面に適切に位置付けていくことが大切である。

例えば「主体的に学習に取り組む態度」は、第1時から第5時までに位置付け、各時間の学習活動に粘り強く取り組んでいるか、また、自らの学習を調整しようとしているかを継続的に見取るようにし、教師の指導改善につなげるための評価として位置付けている。この際、「知識・技能」や「思考・判断・表現」の観点の状況を踏まえた上で評価を行うことが不可欠である。

学習状況を記録に残す際には、本事例の評価規準を基にしながら、「おおむね満足できる」状況、「十分満足できる」状況を判断していくことになる。その際、必要に応じて、予想される児童の姿を幅広く想定しておくことが効果的である。また、「努力を要する」状況と判断されそうな学習状況にある児童に対し、改善のための具体的な働きかけを講じて、「おおむね満足できる」状況となるように支援をすることも大切である。

(5) 各観点別評価の方法

本事例では、それぞれの観点について、以下の方法で評価を進めた。

観点	評価規準	【評価場面】〈評価方法〉[見取りのポイントと改善のための働きかけ]
知識・技能	①[技] 思いや意図に合った音楽表現をするために必要な、呼吸に気を付けて、自然で無理のない歌い方で歌う技能を身に付けて歌っている。	【第2時】〈演奏（歌唱）の聴取〉 [見取りのポイントと改善のための働きかけ] フレーズごとの呼吸に気を付け、「とんぴ」の歌詞の表しているとんぴがゆったりと飛ぶ様子にふさわしい第1, 2, 4フレーズにおける旋律の抑揚表現, とんぴが鳴きながら飛んでいる様子を表している第3フレーズでの変化を捉えた表現などが、実際の演奏で表現できているかについて、グループごとに歌う場面をつくり、演奏の聴取から評価した。必要に応じて、息の流れをイメージして手を動かして歌ったり、互いに歌声を聴き合って歌い方についてアドバイスし合ったりするなどの活動を取り入れた。
	②[知] 曲想と音楽の構造などとの関わりについて気付いている。	「とんぴ」と「エーデルワイス」に関する知識の学習状況について総合的に評価した。〈楽譜を記したワークシートや楽譜に記述した内容、発言の内容〉 [見取りのポイント] 第1, 2, 4フレーズの旋律の共通点や第3フレーズが他の部分と違っていることに気付き、それを感じ取ったことや想像したことと結び付けてワークシートに書いたり発言したりすることができているかについて評価した。
		【第2時】歌唱の活動において、「とんぴ」の曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて気付いている学習状況の評価した。 [改善のための働きかけ] 必要に応じて、旋律の動きを手の動きで表したり、階名で歌うなどしたりするよう働きかけた。また、第1時の学習を思い出して考えるよう促した。
		【第4時】器楽の活動において、「エーデルワイス」の曲想と音楽の構造との関わりについて気付いている学習状況の評価した。 [改善のための働きかけ] 必要に応じて適宜、第一次や第3時の学習を想起して考えるよう促した。
	③[知技] リコーダーの音色や響きと演奏の仕方との関わりについて気付くとともに、思いや意図に合った表現をするために	【第5時】「エーデルワイス」のリコーダー演奏に係る知識と技能として、リコーダーの音色や響きと演奏の仕方との関わりについて気付き、思いや意図に合った表現をするために必要な、音色や響きに気を付けてリコーダーを演奏する技能を身に付けて演奏しているか学習状況の評価した。演奏の聴取を中心に行いながら、補助的に発言の内容や行動の観察、そしてワークシートに記述した内容を判断の参考として総

	必要な、音色や響きに気を付けてリコーダーを演奏する技能を身に付けて演奏している。	合的に評価した。また、個人やペア、グループでの活動の際に、部分的にフレーズを取り出して聴取するなど、学習形態を工夫し、発言の内容や行動の観察を組み合わせながら、実態に合った方法で評価した。 〈演奏の聴取、発言の内容、楽譜を記したワークシートや楽譜に記述した内容〉
		〔見取りのポイント〕グループ練習の過程や発表の際の演奏の聴取から、適切な息の強さやタンギング、運指などとリコーダーの音色との関わりに気付いたことを生かして演奏できているかや、旋律のまとまりを考えながら息つぎをしたり、フレーズの中で音が途切れないように気を付けて演奏したりすることができているかについて評価した。 また、主に発表の際の演奏の聴取から、第1、2、4フレーズでは、それぞれ二つのフレーズをなめらかに演奏したり、第3フレーズでは、歯切れのよい感じを出すためにタンギングに気を付けて演奏したりすることができているかについて評価した。
		〔学習状況を記録に残す場面と改善のための働きかけ〕リコーダーの演奏に関する知識と技能の習得状況について継続的に把握するようにし、第5時で記録に残すようにした。なお、学習状況に課題があった場合、知識と技能のどちらに要因があるかを、発言の内容や行動の観察、そしてワークシートに記述した内容等を補助的に用いて把握するようにし、学習状況を記録に残すだけでなく、適宜、学習の改善に生かすことができるよう指導の中で働きかけを行った。
思考・判断・表現	【思】① 旋律、フレーズ、反復、変化を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったこととと感じ取ったこととの関わりについて考え、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように歌うかについて思いや意図をもっている。	【第1時の後半から第2時】継続的に学習過程を見取るようにした。 〈楽譜を記したワークシートや楽譜に記述した内容、発言の内容、演奏の聴取〉 〔見取りのポイントと改善のための働きかけ〕「とんぴ」の第1、第2、第4フレーズの上下する旋律の動きが、とんぴがゆったりと飛ぶ様子をイメージさせるなど、音楽のよさや面白さを生み出している音楽を形づくっている要素の働きに着目して考えたり、第3フレーズの「ピンヨロ」の部分では、旋律の反復などの特徴を捉えて表現を工夫し、とんぴが鳴きながら近付いてきたり去っていったりする様子を表そうとするなど、表現したい思いや意図をもったりしているかなどを評価した。必要に応じて適宜、第1時の前半で学習した歌詞の表す様子や旋律の反復など曲の特徴を踏まえて、どのように歌うか、実際に歌い試しながら工夫するように助言するなどした。
	【思】② 旋律、フレーズ、反復、変化を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白	【第4時から第5時の前半】主に第4時で学習状況を記録に残し、第5時の前半まで継続的に見取るようにし、適宜、見直すようにした。 〈楽譜を記したワークシートや楽譜に記述した内容、発言の内容、演奏の聴取〉

	さ、美しさを感じ取りながら、聴き取ったことと感じ取ったこととの関わりについて考え、曲の特徴を捉えた表現を工夫し、どのように演奏するかについて思いや意図をもっている。	〔見取りのポイントと改善のための働きかけ〕「エーデルワイス」の第1，第2，第4フレーズの上下する旋律の動きが、雄大な山々や自然を前にした気分を感じさせるなど、音楽のよさや面白さを生み出している音楽を形づくっている要素の働きに着目して考えたり，第3フレーズでの旋律の変化などの特徴を捉えて表現を工夫し，他の部分よりはっきりしたタンギングで演奏しようとするなど，表現したい思いや意図をもったりしているかなどを評価した。必要に応じて，「とんぴ」での学習で学んだことなどを思い出して，どんなことに注意して工夫したらよいかを考えさせるように働きかけた。
主体的に学習に取り組む態度	態① 曲の特徴を捉えて表現する学習に興味をもち、音楽活動を楽しみながら主体的・協働的に歌唱や器楽の学習活動に取り組もうとしている。	【第1時から第5時】曲想と音楽の構造や歌詞の内容との関わりについて気付いたり，曲の特徴を捉えた表現を工夫したり，思いや意図に合った音楽表現をするために必要な技能を身に付けたりする学習に，粘り強く取り組んだり，自らの学習を調整しようとする意思をもったりしているかどうかについて，継続的に見取るようにし，第5時で記録に残すようにした。〈行動観察，学習の振り返りの記述の内容，演奏の聴取〉 〔見取りのポイントと改善のための働きかけ〕知識・技能や思考・判断・表現の観点における達成状況を踏まえながら，発言の内容に見られる学習内容への興味，友達の発言に対する反応，歌っているときの表情や体の動きの観察，歌声の聴取，グループにおいて表現の工夫に取り組んでいるときの様子や，リコーダーを演奏しているときの行動の観察から児童の学習状況を捉えるようにし，必要に応じて適宜，粘り強く取り組むよう励ましたり，授業のねらいを確認し自分なりに考えたり，友達の表現の工夫の特徴やよさに気付かせ，様々な工夫を試させたりするなど指導改善につなげた。このように行動観察を中心に，継続的に学習状況を把握し学習改善や指導改善に生かすようにする一方で，学習状況を記録に残す場面については題材の最後にのみ設定し，学習の振り返りの記述の内容を加味して評価した。

6 観点別学習状況の評価の総括の考え方

（1）題材における観点別の総括例

本事例では，観点ごとに1～3の評価規準を設定している。それらを総括する場合，次のような考え方があ

ア 同等に扱って総括する

イ 重点を置いて総括する

本事例では，「知識・技能」について，「知識」に関する②知，また「技能」に関する①技，「知識」と「技能」を組み合わせた③知技の合計三つの評価規準を設定し，「思考・判断・表現」については，思①と思②の二つの評価規準を設定した。この場合，②知は歌唱及び器楽の両分野について，①技

①は歌唱分野、③知技と②は器楽分野についての評価規準である。本事例においては、「思考・判断・表現」については指導内容に即して、どちらの評価規準も同等に重要であると判断できるため、特に重点を置く評価規準をつくらず、上のアのように同等に扱って総括したが、場合によっては題材の終末に重点を置いた総括も考えられる。

一方、「知識・技能」については、②知は歌唱及び器楽の両分野にわたって評価を行うこと、③知技は知識と技能の両方の内容を対象とすることを考慮し、イのように題材の終末により重点を置いて（重み付けして）総括した。

その場合、総括の考え方としては、下の表のような例が考えられる。

	総括の流れ		総括の考え方の例
	評価規準	題材の 観点別の評価	
ア 同等に扱って総括する	〈思考・判断・表現〉	①→ ②→ 同等に 扱った 総括 A → B C	Aと判断する場合 ・ Aが1個以上の場合 （ただし、もう1個がCではない） Cと判断する場合 ・ 両方ともCの場合 Bと判断する場合 ・ 上記以外全て
イ 重点を置いて総括する	〈知識・技能〉	①技 → ②知★ → ③知技★ → 重点を 置いた 総括 A → B C （★は重点を置いた評価規準）	Aと判断する場合 ・ Aが2個以上の場合 （ただし、②知★又は③知技★のいずれかがCではない） Cと判断する場合 ・ Cが2個以上の場合 （ただし、②知★又は③知技★のいずれかがAではない） Bと判断する場合 ・ 上記以外全て

なお、本題材では、「主体的に学習に取り組む態度」については、題材における学習内容に粘り強く取り組んだり、自らの学習を調整しようとする意思をもったりしているかどうかについて継続的に見取るようにし、学習状況を記録に残す場面は題材の最後のみで行うよう設定したため、総括は不要となる。

知識・技能の判断状況

①技	②知★	③知技★	総括
A	A	A	A
B	A	A	A
A	A	B	A
A	B	A	A
C	A	A	A
A	A	C	B
A	C	A	B
}			
C	C	A	B
C	A	C	B
A	C	C	C
C	B	C	C
C	C	B	C
B	C	C	C
C	C	C	C